

處ニ猿ヲ殺サヌ由、或人語リキ、所ノ名迄ハ承ラズ、マシテ人トシテ恩ヲシラザランハ、ダニ畜生ニモ猶劣レリ、近代ハ父母ヲ殺シ、師匠ヲ殺ス者、聞ヘ侍リ、悲キ濁世ノ習ナルベシ、

〔太平記^{十七}〕山門攻事附日吉神託事

般若院ノ法印ガ許ニ召仕ケル童、俄ニ物ニ狂テ、様々ノ事ヲ口走ケルガ、我ニ大八王子ノ權現ツカセ給タリト名乗テ、此御廟ノ材木急ギ本ノ處ヘ返シ運ブベシトゾ申ケル、略中後日ニコソ奏聞ヲ經メト申テ、其日ノ奏シ事ヲ止メケレバ、神託空ク衆徒ノ胸中ニ藏レテ、知人更ニ無リケリ、山門ニハ西坂ニ軍アラバ本院ノ鐘ヲツキ、東坂本ニ合戦アラバ生源寺ノ鐘ヲ鳴スベシト、方々ノ約束ヲ定タリケル、爰ニ六月廿日ノ早旦ニ、早尾ノ社ノ猿共數多群來テ、生源寺ノ鐘ヲ、東西兩塔ニ響渡ル程コソ撞タリケレ、諸方ノ官軍九院ノ衆徒是ヲ聞テ、スハヤ相圖ノ鐘ヲ鳴ス、サラバ攻口ヘ馳向テ防ガントテ、我劣ラジト渡リ合フ、東西ノ寄手此形勢ヲ見テ、山ヨリ逆寄ニ寄スルゾト心得テ、略中楯ヨ物具ヨト周章色メキケル間、官軍是ニ利ヲ得テ、山上坂本ノ勢十萬餘騎、木戸ヲ開キ逆茂木ヲ引ノケテ打テ出タリケル、略中大將高豐前守師ハ太股ヲ我太刀ニ突貫テ引兼タリケルヲ、舟田長門守ガ手ノ者是ヲ生虜リ、白晝ニ東坂本ヲ渡シ、大將新田左中將義ノ前ニ面縛ス、略中若黨ノ一人モ無シテ、無云甲斐敵ニ被生捕ケルハ、偏ニ醫王山王ノ御罰也ケリト、今日ハ昨日ノ神託ニヨリケルニヤト被思合テ、身ノ毛モ彌立ツ計也、

〔常山紀談^一〕持資田太京に上りしとき、慈照院殿政義饗應せんと、慈照院殿に一ツの猿あり、見

まらぬ人をば、必かき傷ふといふ事を持資聞て、猿つかひに賂して猿をかり、旅亭の庭につなぎ出仕の装束して側を過るに、猿飛かゝるを鞭を以て思ふさまにたゞき伏たれば、後には猿首をたれて恐れ居たり、持資猿つかひの人に禮謝して猿をかへしたり、かくて饗應の目かねて慈照院殿かの猿を、通るべき所につなぎおきて、持資が狼狽するを見んと待れたるに、持資をかゝの猿